

## 本当にあった、新河岸川の話

川への興味関心の向上や治水へ対する理解が深まることを目的として、舟運が盛んであった昔の生活や過去の水害体験談について、話題提供をいただきました。

### 昭和57年9月の台風18号の浸水被害

◆ふじみ野市総務部収税課 出田康彦 課長補佐  
ふじみ野市都市政策部都市計画課 都市計画係 佐藤友直 係長◆



- ・当時は防災を統括する部署がなく、災害対応マニュアルもなかったため、災害対応は建設部を中心に担当していた。
- ・市内ではマンホールから水が逆流する現象が見られた。新河岸川の水位も橋のたもとまで上がっていた。
- ・市では本部を設置し、職員は住居を一軒一軒回り避難を呼びかけた。その間も、お風呂の水を入れるように目に見える速さで水位は上がっていった。
- ・地元の消防団と消防署が救助用の船を準備し、市民の救助にあたった。
- ・最終的におへそのあたりまで水位が上がった。
- ・翌日も一部では水が引かず、道路や畑などが冠水していたため、市民生活に影響を与えた。

### 新河岸川舟運の栄枯盛衰

◆元ふじみ野市立上福岡歴史民俗資料館長  
元ふじみ野市立福岡河岸記念館長  
さいたま民俗文化研究所調査員 高木文夫 氏◆



- ・新河岸川の舟運は、江戸時代初期に川越へ再建資材を運搬したことに始まり、約300年間続いた。
- ・舟運の水路は、仙波河岸(川越市)～新倉河岸(和光市)までが新河岸川だった。
- ・舟運が繁栄した頃は、米・麦・サツマイモの俵物などを運び、河岸に土蔵がたくさん並んでいた。
- ・大正の大水では、福岡河岸と古市場河岸を結ぶ太鼓橋の養老橋が水没してしまった。
- ・明治37年の日露戦争時には、志木河岸から戦地に送るための麦俵を船で運び出していた。
- ・荷物満載の船を上流へ進めるため、ノツケ(船を綱で引っ張る人)を雇っていた。
- ・木材はいかだで流し、下肥は専用船で他の荷物や人とは別に運んでいた。
- ・明治43年の大水害を機に行われた河川改修工事、大正3年の東上線の開通を経て、鉄道輸送と入れ替わるように舟運は徐々に衰退した。